事例２２　　単元「視野を広げる」

読み取ったことをもとに、自分の考えを書こう

国語　第１学年
穴水町立穴水中学校

１　事例の概要

本校では、活用力向上をめざす取組として、「活用型」の発問を取り入れた授業実践を行っている。「活用型」の発問は、ＰＩＳＡ型読解力における「熟考・評価」の問いに相当し、「テキストから読み取ったことを根拠に挙げて、自分の考えを論理的に表現することを求める発問」である。

「活用型」の発問を取り入れた授業では、次のような活動を展開する。

1　テキストから情報を読み取る（ →　主に「判断力」が求められる）
　テキスト（文章や図表、映像その他の資料、実演等）から読み取れる事実、特徴や傾向、筆者の意見等の情報を正しく理解する。
2　自分の考えとその根拠を書く（ →　主に「思考力」が求められる）
　自分の立場を明らかにしたり、自分の考えを述べたりといった言語活動を行う。ただし、その根拠をテキストから挙げる。
3　自分の考えを表現する（ →　主に「表現力」が求められる）
　自分の考えを「話す」「発表する」「つくる」「描く」「歌う」「奏でる」「実験する」「観察する」「演技する」「運動する」などの方法で表現する。

そして、1の読解と2 3の表現とをつなぐのが「活用型」の発問であり、「あなたはどう考えるか」「あなたならどうするか」「あなたは賛成か反対か」「あなたはどれを選ぶか」という問いで多様な考えを求める。これによって思考力・判断力・表現力が三位一体で働くことをねらうものである。

本事例は、第１学年１学期の授業で、中学校で初めて説明的な文章を学習する単元である。そこで、文例の骨子を提示することによって、「なぜなら～からです。」という論理的な書き方で自分の考えを述べることに慣れさせたいと考えた。

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

(1)　単元の目標

① 筆者の考えを理解し、自分の考え方や見方を広げようとする。　【国語への関心・意欲・態度】
② 段落の要点や要旨を読み取り、文章の構成をとらえることができる。　【読むこと】
③ 読み取ったことをもとに、自分の考えを書くことができる。　【読むこと】
④ 言葉の単位とその働きについて理解することができる。　【言語事項】
⑤ 偏旁冠脚や部首の相違を、成り立ちに着目して把握することができる。　【言語事項】

(2)　指導上の工夫点

① 指導法の工夫
・「活用型」の発問を取り入れる。また、その際には「『活用型』の発問のワークシート」を利用して指導案を作成する。
・課題解決型の授業を実践し、導入の工夫に努める。

② 指導重点目標の設定
・活用力に関わる指導重点目標を教科で設定し、思考力・判断力・表現力を高める工夫を行う。

国語科で設定した目標は「文章の内容を的確に読み取る力を育てる。」「自分の考えを論理的に表現する力を育てる。」の２点である。本単元では、まず、挿絵を利用して文章の構成をとらえさせる。また、自分の考えをなかなか書き出せない生徒のために、次のような例文の骨子を提示する。

「わたしは、○○○○を選びます。なぜなら、○○○○は□□□□なので、それを使って△△△△をしてみたいと思うからです。」

③ 学習定着のための工夫

・「活用型」の発問を授業に取り入れ、論理的な短作文を書く経験を繰り返す。

Ｂ－１ 「活用型」の発問のワークシート

３ 指導の実際

過程	配時	学習活動と予想される生徒の反応 ＜活用型の発問＞	指導上の留意点（・） 評価（●） 支援（○）
展開	15	３ 読み取ったことをもとに考えを書く ＜もしもあなたがクジラたちのような音を一種類出せるなら、クリックとホイッスルのどちらを選びますか。その音のよいところにふれて、理由も書きなさい。＞ ・ クリックを選ぶ。なぜなら、暗いところで活動するのに役立つから。 ・ ホイッスルを選ぶ。なぜなら、水の中でも歌うことができるから。	・ 書き出しの部分や、理由を述べる部分の表現を提示し、書きやすくさせる。 ● 読み取ったことをもとに、自分の考えを書いている。（作文） ○ クジラが出す音の特徴を再確認するよう助言する。
	20	４ 考えたことを発表し合う ・ 各班で全員が発表する。 ・ 班の代表者が発表する。 ・ 発表についての感想を話し合う。	・ 学級掲示の「話す態度」「聴く態度」を意識しながら発表させる。

Ｃ－１ 指導案　**Ｃ－２ 生徒の作文**

４ 成果と課題

(1) 成果

① 「活用型」の発問を取り入れたことで、生徒は自分の考えを持ちやすくなり、自分の立場を明らかにしてから「なぜなら～からです。」という表現で理由や根拠を挙げる述べ方に慣れてきた。

② 課題解決型の授業を行い、導入の工夫をしたことで、生徒は興味や見通しを持って課題に取り組むようになってきた。

③ 活用力に関わる指導重点目標を設定し、思考力・判断力・表現力を高める工夫をしたことで、生徒は積極的に課題を解決したり、進んで伝え合ったりするようになってきた。

(2) 課題

① 学習意欲の向上と基礎・基本の習得のために、課題作りなどの授業改善や学習習慣の確立を図る取組を充実させることが大切である。

② 仲間との交流によって一人ひとりの考えが深められるよう、グループ学習に必要なリーダーや、互いの考えを話し合える人間関係、互いに高め合う姿勢を育成することが大事である。

事例２３　　単元「天皇・貴族が中心となった政治と文化」

「資料から読み解く　～奈良時代の人々のくらし～」

社会　第１学年
能美市立辰口中学校

１　事例の概要

本校では、生徒がより意欲をもって臨める授業づくりを工夫してきた。これまで培ってきた道徳教育を軸とした基礎的な力を基盤とし、「基礎的な力をつけ、それを活用するための授業デザイン」という副題のもと、研究を進めてきた。理想的な「授業デザイン」とは、授業で身につけた知識・技能を、生活のいろいろな場面や課題解決へ活用する授業を行うことである。そして、そのことによって、生徒自身が自ら学ぼうという知的好奇心や意欲、自立心を育てる授業をめざした。

Ａ－１　学校研究の概要

２　実践内容

(1)　単元の目標

- 国家のしくみが整えられ、その後、天皇・貴族の政治が展開されたことに対する関心を高め、意欲的に追求しようとする。（関心・意欲・態度）
- 聖徳太子の政治と大化の改新、律令国家の確立、摂関政治を通して歴史の流れと時代の特色を多面的・多角的に考察することができる。（思考・判断）
- 国家が整えられていく課程を色々な資料から、適切に選択して活用するとともに、追求し考察した結果をまとめたり、説明したりすることができる。（資料活用の技能・表現）
- 大陸の文化や制度を積極的に取り入れながら国家のしくみが整えられ、その後、天皇・貴族の政治が展開されたことを理解し、その知識を身につける。（知識・理解）

(2)　指導上の工夫点（視点）

「授業デザイン」を行う上で、①課題の工夫、②考える時間の保障、③話し合いの場の設定、④まとめ及び学習の振り返りという四つの段階を意識した授業づくりが求められている。そこで、この四つの視点に立ち、指導上の工夫点を述べる。

① 課題の工夫

本時の導入では、奈良時代の農民のくらしはどのようなものだったのかという中心課題に迫るために、前時に学習した、班田収授法の内容や税制（租・調・庸）、兵制（衛士・防人）などについて再度確認し、考えたくなる課題につなげることで生徒の意欲化を図った。

② 考える時間の保障

話し合い活動を有意義なものにするためには、個人の意見を確立する時間、また、グループなどで意見交流する時間など、考える時間の保障が大変重要である。そこで、資料を読み取る時間を保障するために、前時に資料を配布し、一人ひとりが充分に考えを持つ時間を設定した。そのため、本時はグループ活動の時間が確保できた。

③ 話し合いの場の設定

今回は、意見交換を充分行わせたいと考え、４人という少ない人数での話し合い活動を行った。また、一人ひとりに司会・発表・まとめ・質問の役割をもたせ、グループみんなで課題にあたるという意識を持たせた。

④ まとめ及び学習の振り返り

子どもたちから出てきた発表内容をもとに、農民の生活の実際を本時のまとめとした。また、授業の最後には、自己評価カードを用い本時の学習を振り返る時間をとった。

Ｂ－１　授業デザインの視点

３　指導の実際

ふかめる	奈良時代の農民のくらしをつかもう ２．奈良時代の農民のくらしはどうであったのか。 資料Ａ　木簡資料 資料Ｂ　戸籍（男女比の割合） 資料Ｃ　戸籍（「逃」の字の意味） 資料Ｄ「貧窮問答歌」 ○グループ内討議をする。 ○グループでの意見をまとめる。 女の数が多いな。多分女の人より男の人の方が兵役や労働が大変だからだ。 田や家などを捨てて逃げ出している人がいる。出挙によって、米を返すのが大変だからだと思う。 着るものもぼろぼろ、食べるものもない。家もたて穴住居で傾いている。何かとっても惨めで大変そうだ。 鯛農民が逃亡している。取り立てが厳しくて、逃げたんじゃないかな。「黒子」とあるのはなぜだろう。

Ｃ－１　指導案　　Ｃ－２　ワークシート①　　Ｃ－３　ワークシート②

４　成果と課題

(1)　成果

① 課題の工夫

前時の学習内容を振り返り、律令制度のもとでの農民の生活を再度確認することで、考えたくなる課題につなげることができ、生徒の意欲化が図れた。その中で、重要な歴史用語も確認することができた。

② 考える時間の保障

前時の最後に一人ひとりに課題を提示したことで、自分の考えをしっかり持つことができた。そのため、本時ではグループ活動の時、それぞれが自分の意見を述べるだけでなく、他の人の意見も知識を持ったうえで聞くので、とてもわかりやすく議論も深まった。

③ 話し合いの場の設定

グループ学習では一人ひとりが役割をしっかりと果たし、お互いの意見を真剣に聞き、グループの意見をまとめていた。また、それぞれの考えを共有したことで、わからなかったことがわかったり、気がつかなかったことを発見したりでき、とても有意義であった。

④ まとめ及び学習

子どもたちはそれぞれの課題から、読み取ってほしい情報を正しく読み取り、きちんと発表することができた。子どもたちから出てきた意見が、そのまま農民の生活の厳しさ・苦しさを表していることから、具体的なイメージがもて、知識としてもしっかり定着したようだ。

Ｄ－１　生徒のワークシート　　Ｄ－２　生徒の自己評価カード

(2)　課題

グループでの話し合い活動では、お互いの意見を聞き思考を深めていくことができた。しかし、他のグループの発表を聞き、自分の学習課題以外から学ぶという活動では、多くの課題が残った。具体的には、お互いに質問したり感想を述べたりする時間の保障、発表の進め方、また、生徒たちの発表の仕方の工夫など、学び合う（共通理解）のための工夫が必要であった。生徒たちは資料から課題に対する答えを持ち、自分自身の言葉で発表していたのに、それをお互いの学びにつなげたり、学習のまとめたりすることができなかった。今後は、生徒たちが学び合うことの楽しさを実感できる学習課題を設定し、お互いに学び取った内容を共有できるような学習活動になるように実践を重ねていきたい。

事例２４　　単元「身近な地域を調べる方法」

地図や資料を使って、多面的に身近な地域を調べ伝えることで友達もわかってくれた

社会　第１学年
野々市町立布水中学校

１　事例の概要

本校は、平成２０・２１年度県の児童生徒の「活用力」向上モデル事業の指定を受け、『自ら学び、自己を高める生徒の育成～基礎的、基本的な知識・技能の習得を図り、「生きる力」を育む授業づくり～』をテーマとして研究実践を進めている。教科としても、この方針に沿って研究を進めてきた。

本年度の基礎学力調査結果の分析を踏まえると、社会科では資料の読み取りの能力について課題が見られた。特に三年生においては、関心・意欲や思考・判断においても課題が見られた。それは、重要項目を覚えることに終始し、関心・意欲を高めたり、思考・判断させたりする場面が少なかったことが課題だったと考えられる。

このような現状分析から、社会科では資料の読み取り方の基本を習得させるとともに、身近な生活に密着した資料を使うことで、関心・意欲も高めていくこととした。また、複数の資料から情報を読み取り思考していくスキルをグループ活動を通して発展的に指導していくこととした。

Ａ－１　学校研究の概要　　Ａ－２　研究の構想図　　Ａ－３　布水中学校授業スタイル

２　実践内容

(1)　単元の目標

・身近な地域の調査について関心を持ち、地域の特徴について複数の資料を活用して調べるなど、意欲的に追究しようとする。（関心・意欲・態度）

・複数の資料を活用して調べ、身近な地域の特徴を多面的に考察することができる。（思考・判断）

・身近な地域を調べるために適切な資料を収集・選択し、そこから解釈した身近な地域の特徴を工夫して表現することができる。（技能・表現）

・地図などの資料は目的や用途によって表され方が違うことを知り、複数の資料を使い分けることを通して身近な地域を多面的に理解する。（知識・理解）

(2)　指導上の工夫点（視点）

①「学習意欲の向上」

・授業導入時における工夫

・授業での決まり事の明確化（学習規律）

・教材提示方法の工夫

・肯定的な声かけ

・がんばりシール

・生徒の作品を用いた学習の展開

・「活発な時間」と「静かな時間」を意識的に組み立てた授業づくり

②「学び合い活動」

・「個人→グループ→個人」の流れを意識した授業展開

・話し合いの形態の工夫

・さまざまな表現方法の導入（口頭発表・新聞・黒板掲示など）

・評価表の導入（自己評価・他者評価）

③ 「学習の基礎・基本の定着」

・繰り返し練習

・小テストの取組

・少人数を生かした個別指導

・学び合う共感的な人間関係

Ｂ－１　指導法の工夫

３　指導の実際

過程	配時	○生徒の学習活動 ・予想される生徒の反応	教師の指導、支援(●)と 評価（◎観点、【　　】方法）
考える	20分	○ 分担して調べ、調べたことをグループ内で説明し合う。 ・そんな場所があるのか。 ・今と昔でだいぶん違うな。 ○ 聞いた説明を参考にし、各自が野々市町の紹介文をつくる。	・グループ内で、調査内容を共有しあう。(共) ・ どんな資料から何がわかったのかを伝え合うよう促す。 ・ メモを参考にしながら整理して紹介文をつくるよう助言する。
まとめる	10分	○ 班代表の発表を自分が書いた紹介文と比較しながら聞き、野々市町の特徴を整理する。	③ 様々な資料を活用して野々市町の特徴をつかみ、町の紹介文を作成している。【発表・ﾜｰｸｼｰﾄ】 □ どの資料からどのような特徴がつかめたのかを整理するよう助言する。(基) （C→B）【ワークシート】
		まとめ　様々な資料を使えば、いろいろな角度から野々市町の特徴をとらえ紹介することができる。	
		○ 自分の紹介文の改良点や本時で学んだことをワークシートに記入し、発表する。	・ 発表者の発表を聞いて、自分の紹介文を振り返るよう助言する。

Ｃ－１　指導案

４　成果と課題

(1)　成果

・ペアでの話し合いがスムーズに行われ、調査内容を共有できたことは、課題に迫る手だてとして有効だった。

・様々な資料（新旧の写真や、地形図、他地域の資料などの利用）から得られた情報を関連づけて、課題に迫る授業展開の工夫が見られた。

(2)　課題

・板書計画をさらに思考の流れに沿って構築する必要がある。

・板書の際、チョークの色の工夫や意見を整理するためのさらなる工夫があるとよい。

・単元を構成し、授業を展開していく流れの中で生徒の意見を生かしたまとめ方を工夫する。

・地形図、写真の意見が同じものが多かった。班によって使う資料を変えるとよい。

・表現する活動は充実してきたが、子ども同士が討論し、協同的に課題を解決する学習法を取り入れることも考えていかなければならない。

事例２５　　単元「身近な地域の調査」

邑知地区の「未来予想図」を描いてみよう

社会　第１学年
羽咋市立邑知中学校

１　事例の概要

本校では「知・徳・体」の調和のとれた教育活動の推進と合わせて、平成１４年～１６年「文部科学省委嘱事業・学力向上フロンティアスクール事業」及び平成１７年～１９年「文部科学省委嘱事業・学力向上拠点形成事業」の指定研究の取組を通して、特に「確かな学力」の育成と定着に力を注いできた。その中で練り上げられてきた学力向上策が『邑知システム』であり、その支援策として作り上げられたのが『邑知システムを支える環境づくり』である。これらは、「生きる力」を具現化する方法として、学校内だけでなく家庭や地域にも浸透してきており、特に学力の向上（基礎的・基本的な学習内容の定着）において成果を上げている。

８年目の実践となる今年度は平成２０年度～２１年度「児童生徒の『活用力』向上モデル事業・推進モデル校」の実践の２年目となる。これまでの成果と課題を踏まえながら、「『知・徳・体』の更なる調和と、学力面における『基礎・基本』及び『活用力』の定着」に重点を置いた形で『邑知システム』と『邑知システムを支える環境づくり』を実践中である。

社会科としては、活用力を以下のようにとらえている。

・身につけた知識を活かし、社会的事象の問題や課題を適切な資料を用いて、多面的・多角的に考察する力
・自分の考えを言葉や図・表などを用いて表現する力

以上の概要の趣旨を受け、社会科の「活用力」向上の取組の軸として実践を進めている。

Ａ－１　仮説と実践の概要　　Ａ－２　キーワード　　Ａ－３　『邑知システム』と『邑知システム支える環境づくり』

２　実践内容

(1)　単元目標

① 身近な地域に対する関心を高め、その観察や調査などに意欲的に取り組み、身近な地域の特色をとらえる。（①社会的事象への関心・意欲・態度）
② 身近な地域の地理的事象から課題を見いだし、それを環境条件や人々の営みなどと関連付けて多面的・多角的に追究するとともに、身近な地域の地域的特色をとらえる視点や方法を考察する。（②社会的な思考・判断）
③ 身近な地域に関する観察や調査、地図や統計その他の資料の収集を行い、学習に役立つ情報を適切に選択して活用するとともに、身近な地域の特色を追究し考察した過程や結果をまとめたり、発表したりする。（③資料活用の技能・表現）
④ 身近な地域の地域的特色とそれをとらえる視点や方法などを理解し、それらの知識を身に付ける。（④社会的事象についての知識・理解）

(2)　指導上の工夫点

社会科では、中教審が示した活動例の中の「情報を分析・評価し論述する」、「互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる」に注目し、これらを年間指導計画の中で活動として具体化していくことを試みた。

本単元においても、新旧の地図を比較し昔の身近な地域を想像する活動や、学習してきたことをもとに身近な地域の課題や将来像について考察する活動などの中で、既習事項を活かし自分の考えをまとめ、文章や図で表すことができるようにさせることで、「活用力」が育まれるように留意した。

Ｂ－１　単元計画　　Ｂ－２　指導法の工夫（題材観・指導観）　　Ｂ－３　評価計画（評価観）

３　指導の実際

学習内容・活動＜学習形態＞	・指導上の留意点
邑知地区の「未来予想図」を描いてみよう。	
○　邑知地区にはどのような課題があるのか考え、発表する。 ＜グループ・一斉＞	・前時の発表会をもとに、邑知地区の「地域の環境条件」、「他地域との結びつき」、「人々の営み」の３つの視点からとらえ、意見をまとめさせる。 ・根拠を明確にしてまとめることを助言する。
○　邑知地区の将来像について予想や願いを考え、発表する。 ＜個人・一斉＞	・これまで活用した資料や、調査結果から地域的特色を確認させる。 ・今後、邑知地区がどのようになっていくのか予想と願いを考えさせ、地域の一員である意識を持たせる。

自分たちの身近な地域を、校区である邑知地区と設定した。校舎から見える邑知地区の様子を写生したり、生徒の家の周りの写真から読み取ったりする作業を行い、邑知地区の特色について考えるきっかけとした。地形図の見方を学ぶだけでなく、景観、航空写真、地形図を比較することで、地形図の情報量の多さにも気づくことができた。

調査活動後のまとめる活動では、集めたデータをもとに、グラフや分布図にまとめるなど、生徒たちの様々な工夫が見られた。人口の減少、農業就業者の割合、空き家の分布、特産物の他地域との関わりなど、生徒たちが調査したものをもとに、邑知地区の課題について考えた。そして、それらのことをもとに、将来の邑知地区の姿を予想する活動を行った。

Ｃ－１　本時指導案

４　成果と課題

(1)　成果

・課題に対して必要な基礎・基本を活用しながら解決に向かう生徒、根拠を示して筋道を立てて自分の考えを述べようとする生徒が多く見られた。
・地図を有効に活用したり、データをグラフ化して活用したりする姿が見られた。
・自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりする姿が見られた。
・身近な地域のマイナス面を知るだけでなく、明るい未来もイメージすることができた。

(2)　課題

・基礎・基本の定着のためにも、用語の関連を明らかにさせ、それぞれの用語がまとまりのあるものとして学習できるように取り組ませていく。
・考える時間を確保し、意見の交流など他の学習方法も組み合わせ、考える力を高めるための工夫をしていく。

事例２６　　小単元　「武士の世のはじまり」

元寇が日本にあたえた影響

～徳政令が出されたナゾにせまる～

社会　第１学年
能登町立小木中学校

１　事例の概要

本校では、自分の考えを表現したり、伝え合ったりすることを柱とした言語活動の充実を図ることにより、学ぶ意欲、学んでいこうとする意欲を高める授業につなげ、活用力の向上を図ることを目指している。その中で、研究の視点を「思考力・判断力・表現力等の充実をはかるための授業の改善」「基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着」「学習の基盤づくり」「家庭・地域との連携」の４つに絞り、実践に取り組んできた。

社会科においては、「授業の改善」の取り組みとして、活用力の到達目標の設定、単元指導計画の工夫、学習過程の工夫に重点を置いた。まず、活用力が身についた姿を具体的にイメージするために、学年ごとに活用力の到達目標を「思考力・判断力」「表現力」に分けて設定した。この到達目標に近づけるためには、どのような資料を提示し、どのように活用するかがポイントになる。そこで、単元のどの時間にどのような資料を準備するのか、どの時間に活用力を意識した授業を行うのかなど、単元を見通した指導計画を作成した。また、資料から読み取ったことを、その人物の立場になって考えを書かせたり、単元のまとめには新聞づくりを取り入れたりすることで、関心・意欲を高めながら学習を進めた。

Ａ－１　学校研究の概要　　Ａ－２　研究構想図　　Ａ－３　活用力の到達目標

２　実践内容

(1)　単元の目標

中世の社会の変化、文化の広がりと東アジアとの関わりに関する図版、史料、年表、歴史地図などのさまざまな資料を収集し、適切に選択して活用するとともに、中世の日本の動きを政治・経済・対外関係・文化などの項目に分けて考察し、新聞にまとめたり説明したりすることができる。

(2)　指導上の工夫点

① 活用力向上のための手だて

ア 資料選択の工夫

・多面的な立場から価値判断をすることができる資料。
・根拠を持って価値判断をすることができる資料。
・同じ価値判断でも、その根拠が複数ある資料。
・自分たちの生活に結びついた資料。

イ 授業展開の工夫

・資料を分析し、自分の言葉でまとめる場を設定する。
（本時では、ワークシートの中に吹き出しの部分をつくり、生徒自身が御家人の立場で考えを書くことができるようにする。）
・複数の資料から、多面的・多角的に課題を追求する場面を設定する。
・グループ学習を行い、他人の考えを聞く場を設定する。

② 関心・意欲を高めるための工夫

ア 単元の学習に見通しを持たせる。

・単元の導入時に、時代の様子を大まかにとらえさせる。

・単元のまとめとして、歴史新聞を作成することを知らせる。

イ まとめ方の工夫

・「幕府の信頼度グラフ」を１時間ごとに記入していくことにより、時代の流れをつかませる

・歴史上の人物になったつもりで考えを書かせる。

Ｂ－１　学習過程の工夫

３　指導の実際

	主　な　学　習　活　動	支援（★）評価（◎） 【評価方法】**活用の場**
つかむ	１．前時に学習した元寇について復習する。	
考える 深める	２．元寇の後、御家人の生活がどのように変わったのか『徳政令』をもとに考える。 元の襲来は、鎌倉幕府にどのような影響を与えたのだろう ３．学習活動２を参考に、御家人の立場と幕府の役人の立場で、それぞれの吹き出しに書き込む。【ワークシート①】	**資料をもとに、自らの考えを表現することができる。** ◎元寇が鎌倉幕府に及ぼした影響について、資料を読み取り自分の意見をまとめることができる。 （技能・表現） 【発言・ワークシート】 ★考えがまとまらない生徒は、学習活動２を振り返り考えさせる。

Ｃ－１　指導案（単元指導計画の工夫）

４　成果と課題

(1)　成果

・活用力を意識した授業展開を考える上で、いろいろな角度から思考・判断できる資料を厳選するようになった。それにより、生徒は資料に興味・関心を持ち、学習課題に意欲的に取り組むようになった。資料の提示により、歴史上の出来事と生徒自身を結びつけることができたときは、特に関心・意欲が高まった。

・学習活動に自分の言葉で表現する活動を取り入れたことにより、まとめることを意識して授業に取り組むようになった。

(2)　課題

・資料を提示する際に、どのような順序で資料を読み取っていくかという具体的な指導が必要である。

・自分の考えを表現させるための学習活動を、単元の中に、より多く位置づけるために、さらに綿密な指導計画を立てる必要がある。

事例２７　　単元「住民として地方の政治を考えよう」

読解力を核とした授業

～ 加 賀 市 の 予 算 か ら地 方 財 政 を 考 え る ～

社会　第３学年
加賀市立錦城中学校

１　事例の概要

本校は「確かな学力」としての「生きる力」の育成をめざした研究を、ここ数年続けている。従来の「基礎・基本」を大切にした授業づくりに加え、近年は生徒達がこれまで学び、身につけてきた知識・技能を活かして課題に取り組む授業づくりにも取り組んできた。

そのような授業を実践するために、今年度も「読解力」を授業の核に据えた授業づくりに全教科で取り組んでいる。社会科でも、「読解力」が求める様々な力の育成のためにどのような学習活動が考えられるのかを教科部会で検討してきたが、「資料を読み解き、文章として表現し発表する力」、「自分の意図を資料として作成し、発表する力」、「他者の発表を客観的に受け止め、自己の学習を高めていく力」を社会科としての「読解力」と捉え、生徒が主体的に課題に取り組めるよう工夫してきた。

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

(1)　単元の目標

・地方自治の基本的な考え方を理解し、議会制民主主義の意義について考えようとする。（関心・意欲・態度）

・まちの財政状況やしくみを理解し、自分のまちをより住みよくするための方策を考える。（思考・判断）

・自分の町の情報を表す資料を的確に読み取り、その特徴をつかまえる。（技能・表現）

・地方公共団体の政治のしくみについて理解し住民としての自治意識を身につけるとともに、地方公共団体のしくみと住民の権利や義務とを関連させて理解する。（知識・理解）

(2)　指導上の工夫点

① 指導法の工夫

・地方自治の課題を、身近な加賀市の問題と関連づけて考えられるよう、具体的なグラフ・統計資料（加賀市の予算）などを効果的に用いた。

・どの生徒も意欲的に学習に取り組めるよう課題に応じて、グループ学習などを効果的に取り入れるなど学習形態を工夫した。その際、スムーズにグループ学習に取り組めるよう、事前に役割分担を提示した。

・生徒が考え、まとめあげた加賀市の方策が、生徒にとって身近なものになるようゲストティーチャー（加賀市行財政課）のお話をいただいた。

② 「読解力」の視点から

・加賀市の財政を例にあげながら地方公共団体の財政の課題をつかませ、中立性に留意しながらその解決策について主体的に関わるという視点から、生徒が考え発表するようにした。

・発表の際には「キーワード」を提示させ、自分の言葉でグループの考えを発表するようにした。

Ｂ－１　指導・評価計画

３　指導の実際

<table>
<tr><th>学習活動</th><th>指導上の留意点</th><th>評価（観点・方法等）</th></tr>
<tr><td colspan="3">・資料をもとに加賀市の財政の特徴を読み取ろう！
・加賀市の財政をより良くするための方策を考えよう！</td></tr>
<tr><td>・加賀市の歳入、歳出の特徴を読み取る。</td><td>・課題を絞り、あまり時間をかけすぎないようにする。
・民生費などの用語説明をする。</td><td rowspan="3">・資料から、加賀市の歳入、歳出を読み取ることができる。（技能・表現）
【観察、ワークシート】

・加賀市の財政をより良くするための方策を考えることができる。（思考・判断）
【観察、ワークシート】</td></tr>
<tr><td colspan="2">・加賀市の財政をより良いものにするための方策を考え発表する。
・歳入、歳出の資料を踏まえて考える。
・グループ内で役割（司会、発表者など）をあらかじめ決めておく。
・「キーワード」を提示しながら、発表する。</td></tr>
<tr><td>・ゲストティーチャーのお話を聞く。

・まとめを書く。</td><td>・話す内容、時間など市の方としっかり打ち合わせをしておく。</td></tr>
</table>

Ｃ－１　指導案

４　成果と課題

(1)　成果

① 歳入の資料の読み取りは、はっきりとした特色が読み取りづらかったが、歳出の資料の読み取りは、どの生徒もできたように思われる。

② 今後の方策を考える課題は、グループ内の役割分担を示したことにより、比較的スムーズに取り組むことができた。

③ グループ学習では、生徒たちが意欲的に意見を出し合い、ある程度課題に迫ることができた。

④ 発表では「キーワード」を提示し、発表者が自分の言葉で発表することができた。生徒が考え出した方策も単純なものではなく、しっかり考えられた方策が多かった。

⑤ 加賀市の行財政課の方にゲストティーチャーとして授業の最後にお話をしていただいたが、そのことで生徒の考えがより身近なものになったように思われる。

(2)　課題

「読解力」の育成を考える時、どのような学習活動が求められるのかを授業者が明確にして授業を組み立てることが重要である。そのためには、「読解力」という言葉でくくられている個々の能力を明らかにし、「どの単元（教材）で、どのような能力を」育てられるのか、教科として共通の目安を持たなければならない。また、その手段としての学習活動や学習時間、発問も磨き上げる必要がある。このような視点からいうと、本時の授業はまだまだ満足のいくものではない。これからも社会科として共通の認識を持って、どのような能力を育てるべきなのかを検討していきたい。

事例２８　　単元「消費者として経済を考えよう」

思考力・判断力・表現力を育むための言語活動の工夫

社会　第３学年
小松市立安宅中学校

１　事例の概要

本校では平成１８年度から「確かな学力」の向上を目指した研究を進めてきた。今年度は、「考えを伝え合い、高め合う生徒の育成」を研究主題とし、思考力・判断力・表現力を育むため、各教科において言語活動を充実させることとした。

社会科においては、これまでも適切な資料を収集し活用すること、多面的・多角的に考え表現することを大切にしてきた。また、社会的事象の意味・意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明する活動を充実させることにも取り組んできた。

本事例は、ねらいの達成のために言語活動を工夫し、多面的な思考・判断及び表現する力の育成を試みた実践である。

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

(1)　単元の目標

・個人の経済活動に対する関心を高め、それを意欲的に追究しようとする。
【社会的事象への関心・意欲・態度】

・個人の経済活動のあり方についてさまざまな立場から公正に判断することができる。
【社会的な思考・判断】

・個人の経済活動に関するさまざまな資料を収集し、学習に役だつ情報を適切に選択して活用することができる。また、追究し考察した過程や結果をまとめ、他の人にわかりやすく説明することができる。【資料活用の技能・表現】

・経済活動の意義、市場経済の基本的な考え方の知識を身につける。
【社会的事象についての知識・理解】

(2)　指導上の工夫点（視点）

① 指導法の工夫（言語活動を充実させるために）

・活用力をはぐくむための学習活動例をつくり、授業設計の土台とした。そして、各単元でどのような言語活動を行うのかをシラバスに位置づけ、生徒にも年間の見通しを持たせた。
・学習活動の場面を意識づけるカード（考える・決める・伝える・高め合う）を利用し、授業の見通しを持たせるとともに場面を意識させた。
・根拠を明確にした発表や表現活動を多く取り入れた。
・板書以外の記録やメモをとるなど、学習のあしあとが見えるノートづくりを心がけさせた。
・少人数のグループによる話し合いやディベートなど、学習形態を工夫した。

② 問題解決的学習の工夫

・資料を読み取り表現する力、資料を関連づけて考察する力などを高められるように必然性のある課題を工夫した。
・実社会や実生活と関連した課題を多く扱うようにした。

③ 学力定着のための工夫

・始業・終業時間のけじめをつけるなど、授業に集中できるように授業規律を徹底した。
・小テストや復習の時間を確保した。また、ワークなどに繰り返し取り組ませた。
・論述問題に多く取り組ませた。

Ｂ－１　単元の指導・評価計画　　**Ｂ－２　指導法の工夫**

３　指導の実際

★はねらいを達成するための言語活動

学習活動	指導上の留意点（☆は支援）	◆評価の観点 評価規準〔評価方法〕
さまざまな小売店の良さとこれからについて考えよう		
③それぞれの小売店や商店街が取り組んでいることを調べ、考えたことを説明する。	・資料から読み取れることをワークシートに簡潔まとめ、説明させる。 ・自分の考えと友達の考えを比較させる。	◆ 資料を活用して、様々な小売店の取り組みを説明している。【技能・表現】 （発表・ワークシート）
④★今後、様々な小売店はどのように変化していくか、意見交換を通して考える。	・各小売店が持つ良さ、課題を踏まえて考えさせる。 ・グループで意見交換をし、必要な意見はメモをとらせる。 ・根拠を述べて発表させる。 ☆わからない生徒には、どう変わって欲しいかを考えさせるようにする。	◆ 今後、様々な小売店はどのように変化していくか、多面的・多角的に考えている。【思考・判断】 （発表・ワークシート）

Ｃ－１　指導案　　**Ｃ－２　ワークシート**

４　成果と課題

(1)　成果

① 指導法の工夫

各単元に活用力をはぐくむための学習活動例を位置づけたことにより、生徒に見通しを持たせることができた。また、カードを用いて学習活動の場面を意識させることで、目的が明確化され、より効果的な活動を行うことができた。その他、根拠を明確にした発表や表現活動、ノートの工夫、学習形態の工夫などにより、論理的な思考のできる生徒が増えてきた。

② 問題解決的な学習の工夫

資料を正確に読み取り記述したり、その資料から何がわかるのかを説明したりする活動を数多く行うことで、資料を活用し表現する力が向上してきている。また、実社会や実生活での体験を通して考えられる課題は、思考への意欲につながった。

③ 学力定着のための工夫

授業規律を徹底させることで、授業への集中力が高まった。また、既習事項を繰り返し確認することで、基礎基本の定着を図ることができた。

(2)　課題

自主的・意欲的な学習活動を行うために、言語活動の意義を生徒に一層自覚させていかなければならない。また、教師は、思考力・判断力・表現力をつけるために、言語活動を単元のどの場面で設定するか、さらに工夫しなければならない。

特に、社会科においては地図や統計などの資料を使う場面が多い。資料を活用して考えを表現する力がさらに向上するように、資料の精選や提示方法の工夫などを図っていく必要がある。また、ねらいを達成するためにはどのような課題を設定したらよいか、どのような言語活動が効果的であるかを常に考えていかなければならない。

事例２９　　単元「国民生活と福祉」

社会保障制度の今後の在り方について考えよう

社会　第３学年
津幡町立津幡中学校

１　事例の概要

津幡中学校では、「意欲を持って主体的に学ぶ生徒の育成」―『活用力』の向上をめざして―」という研究主題のもと、授業実践に取り組んでいる。思考・判断したことは表現してこそ伝わるという考えから、今年度は特に表現力の育成に重点を置いた。

授業づくりとしては、次のことを共通理解し、取り組んできた。

・単元計画のなかに習得したことを活用する学習活動を意識して設定すること
・課題解決型の授業を組み立てること
・「学び合い」の場（生徒一人ひとりが課題に対する考えを持ち、互いが関わりあうことで個々の学びを深めることができる場）を大切にしていくこと
・よりよい表現力の手だてとして、理由・根拠を挙げて表現するようにさせること

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

⑴　単元の目標

・租税の意義と役割、少子高齢社会や経済上の諸課題に関心を持ち、意欲的に追究しようとする。（社会的事象への関心･意欲･態度）
・国民生活と福祉の向上を図るために、国や地方公共団体が果たしている役割や問題点について多面的･多角的に考え、さまざまな観点や立場から判断することができる。（社会的な思考・判断）
・社会保障や経済に関する資料を集め活用して自分の考えをまとめたり、分かりやすく発表をしたりすることができる。（資料活用の技能・表現）
・国民生活と福祉の向上を図るために、国や地方公共団体が果たしていることがらについてそのあらましを租税と財政、社会保障、公害と環境を通して理解し、その知識を身につけることができる。（社会的事象についての知識・理解）

⑵　指導上の工夫点

「活用力」（特に「表現力」）を高める工夫としては、資料に基づいて現状を認識した上で、社会保障制度の充実のために国や地方公共団体が果たすべき役割について考え、自分の意見の根拠を明確にして発表し合う場を設定する。さらに定年退職した方へのインタビューを通じて、社会保障がお金だけではないことに気づかせ、考えを深める場を設定する。

３　指導の実際

配時	生徒の学習活動	教師の支援（☆）と評価（◎）
つかむ	・前時の学習活動を振り返り本時の課題を確認 社会保障制度の今後の在り方について考えよう	
追究する	・外国の社会保障制度の違いを調べ、わかったことを発表する。 ・アメリカとスウェーデンの社会保障制度のメリット、デメリットについて調べ、表にまとめる。 ・日本の社会保障制度は、今後拡大して行くべきか（スウェーデン型)、縮小していくべきか(アメリカ型）を考え、自分の考えを記入する。 ・ネームプレートを使い、自分の意見を黒板で示す。 ・それぞれ根拠を明確にして意見を発表する。	☆アメリカとスウェーデンの社会保障制度を、ロールプレイ形式で理解させる。 ☆資料パネルを使って２つの国の社会保障制度を比較する表にまとめる。 ☆キーワードを示して考えを深めさせる。 ・左右に伸びる矢印上にネームプレートを貼らせ、他の考えが見られるようにする。
まとめる	・意見交換後の自分の意見を記入し、振り返りをする。 ・高齢者にとって生きがいのある社会とはどのようなものなのか、定年退職した方へのインタビュービデオを見て考える。	・変容や深化した点に着目し記入させる。 ◎自分の考えを深めることができている。 （社会的な思考・判断） ☆高齢者へのインタビュー映像から、お金だけではないことに気づかせる。 ・津幡町で行われている高齢者福祉の政策についても知らせる。 ・自分たちにも関われる分野であることを確認する。

Ｃ－１　指導案　　Ｃ－２　ワークシート

４　成果と課題

(1)　成果

社会科の授業の流れを共通してパターン化し、「調べよう」「考えよう」「まとめ」の３段階で授業実践を積み重ねてきた。また、社会的事象の事実認識をした上で、今後どうしていくべきか・どちらがより良い姿か等の判断を迫り、思考を促してきた。その結果、資料から読み取る力やそれを元に考える力は育ってきている。

また、自分の意見を文章で表現し、それをクラス内で交流することでさらに自分の意見をふくらませる作業も積極的に取り入れてきた。本実践でも事実に基づき将来はどうしていくべきかについてさまざまな意見が交流された。どの意見も事実に基づいた理由と将来の願いがこめられた意見になっていた。

まとめる場面で高齢者の方々がどのような思いで暮らしているのかを聞いたことで、自分の考えを見直したり、深めたりすることもできた。

(2)　課題

意見を発表する活動では、どうしても相手を意識した声の大きさなどが大切である。「追求する」場面で取り入れたロールプレイは、しっかりと大きな声で演じることができていたが、自分の意見発表の場面では、発言することに自信を持っている生徒が積極的に発言していた。もっと多くの生徒がそのような場面を体験し、表現力が向上するよう支援していきたい。

事例３０　　単元「わたしたちの生活と経済」

資料をもとに正規雇用・非正規雇用の長所・短所を出し合うことによって、自分の働き方を考える

社会　第３学年
内灘町立内灘中学校

１　事例の概要

「自分の考えをもち、関わり合い、深め合う授業の工夫」を研究主題として、活用力(思考力・判断力・表現力等)の向上を目的に昨年度より学校研究を進めている。本校の実態として、学力調査等の分析から活用力に弱い部分があることがわかってきた。これを受けて、「①学習場面に応じた指導・教材の工夫、②課題解決型の授業設計、③個人思考・集団思考の設定と補助発問の導入、④聴き方・話し方の指導の工夫」の４つを視点に授業づくりを行うことにした。各教科部会では教科における思考力・判断力・表現力を洗い出し、指導のあり方について具体化を進めている。本単元では、全体を通してのテーマを「人生における選択」と設定し、その中の「働き方」に焦点を当てて本時の課題を設定している。

Ａ－１ 学校研究における授業の視点	Ａ－２ 各教科における思考力･判断力･表現力の捉え

２　実践内容

(1)　単元の目標

・シミュレーションや討論などの学習活動に積極的に取り組み、消費者・労働者としてのあり方について意欲的に考えようとしている。　(社会的事象への関心・意欲・態度)
・経済活動における家計や企業の役割としくみ、社会生活における職業の役割や意義等について多面的・多角的に考え、公正に判断することができる。　(社会的な思考・判断)
・経済活動に関する様々な資料を収集・選択・活用しながら、課題について考えた過程や結果を、わかりやすく説明することができる。　(資料活用の技能・表現)
・市場経済の基本的な考え方、生産のしくみや金融のはたらきについて、正しく理解し、まとめることができる。　(社会的事象についての知識・理解)

(2)　指導上の工夫点

学校研究の授業づくりの視点に位置づけて、工夫点をあげる。

① 学習場面に応じた指導・教材の工夫
・正規雇用・非正規雇用の違いが読み取れるいくつかの資料を提示・比較する中で、それぞれの利点・問題点に気づかせる。
・介護の現場で働く先輩の例を挙げることで、「収入」と「時間」以外の視点に気づかせ、「働く」ことの意義について考えを深めさせる。

② 課題解決型の授業設計
・ライフプランを立てる作業の中で気づいた「収入」と「支出」の関係からつなげて、本時の課題を設定する。
・「予想を立てる」→「確かめる」→「まとめる」過程の中で、各自の考えの深化を図る。

③ 個人思考(自分の考えを持つ場)・集団思考(関わり合い深め合う場)の設定と補助発問の導入
・個人思考では、書く活動を取り入れる。書く活動には、「意識的に考えさせる」「考えを自分の言葉で表現させる」「教師が思考を把握できる」などの意図がある。
・集団思考では、補助発問を行う。補助発問には思考にゆさぶりをかけて深めるねらいがある。

④ 聴き方・話し方の指導の工夫
・結論先行型の話し方（３セット発言）で発表をつなげることで、表現力の向上や思考の深まりをねらう。

３　指導の実際

配時	学　習　活　動	支援（・）評価（◆）
展開 ３５	２　課題設定　課題を知る。 **あなたは、どう働きたい？**	
	３　個人思考　Ａさん・Ｂさん・Ｃさんのセリフを読み、どの形で働きたいか、ワークシートにまとめる。 書く活動 ４　Ａ～Ｃのどれかにネームプレートを貼り、自分の考えを示す。 ５　集団思考　正規雇用・非正規雇用それぞれの働き方のメリット・デメリットについて資料をもとに出し合う。 ６　各班で出た意見を発表する。 正規雇用：残業や休日出勤があったりして、労働時間が長い分、収入が多いが、過労死といった問題もある。給料には男女差がまだ大きい。 非正規雇用：時間にゆとりがあり、特に結婚している女性にとっては家庭と両立しやすい働き方である。でも、ボーナスがなく、収入も不安定。食べていくためには、仕事をかけ持ちしなければならないので、自由な時間ができるとは限らない。	・Ａ・Ｂは正規雇用（Ａは終身雇用・年功序列型、Ｂは成果主義型）、Ｃは非正規雇用のモデルとして考えさせる。 ・３セット発言を意識させて、何人かに発表させる。 ・資料を配付し、班ごとに考えさせる。 ・結論だけの発表にならないよう、根拠となる資料と理由をつけて説明するよう助言する。 ・グラフを提示して、非正規雇用の労働者が増えている近年の傾向を読み取らせ、それがなぜなのか、雇う側の立場からも考えさせる。
	なぜ、Ｄさんはこんなに生き生きしているのだろう？ 誰かの役に立っているという充実感が、Ｄさんの生きがいになっているんだな。 働くことの目的は収入を得ることだけではないのだな。 ７　まとめ　課題に対するまとめを書き、発表する。	・介護の現場で働くＤさんの体験談を紹介し、収入以外の働く意義について気づかせる。 ◆働くことに関する自分の考えを深め、まとめることができる。（思考・判断）

Ｃ－１　指導案　　Ｃ－２　ワークシート

４　成果と課題

(1)　成果

・経済学習の導入としてマネープランゲームを取り入れたことで、経済の学習に対する関心の高まりが見られ、本時の活動にも意欲的に取り組む生徒が多かった。
・リレー発言等によって互いの意見を聴きあい、自分にはなかった視点に多くの生徒が気づいた。
・先輩の生の声を紹介することで、働くことの意義について考えを深めることができた。

(2)　課題

・提示する資料の吟味（生徒の実態に合っているか・ねらいに即しているか・量は適当か、等）と、班で調べたことの発表の仕方（できるだけ多くの捉え方を、時間内に出させる）の工夫がさらに必要である。
・生徒の発言のどの部分に焦点を当てて追究させるかが、授業を深めるための重要ポイントであると考える。今後も日々の授業の中で研鑽を積んでいかなければならない。

事例３１　　単元「葉のつくりと働き」

思考の深化や変容を導くための工夫

理科　第１学年
宝達志水町立押水中学校

１　事例の概要

本校の生徒は、基礎学力調査の結果から基礎的・基本的な知識・技能の習得については概ね出来ているが、思考力・判断力・表現力の面で劣る実態がみえてきた。また、日頃の学習や学校生活においても、指示されたことは出来るが、自ら考え学ぼうとする意欲や既習の知識や技能を使って考えたり表現したりする力が不十分である。

そこで、「思考力・判断力・表現力」を高めるための中心となる活動場面は授業であることを強く認識し、「授業改善」に焦点を当てることにした。授業の中で基礎的・基本的な知識・技能を身に付けるとともに、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育成したいと考え、「～思考の深化や変容を導くための工夫に重点をおいて～」とテーマを設定し、研究の焦点を絞り取り組むこととした。

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

(1)　単元の目標

① いろいろな植物の葉の特徴やつくりや働きに関心をもち、意欲的にこれらの観察や働きを調べる実験をしようとするとともに、生命を尊重しようとする。　　(関心・意欲・態度)

② いろいろな植物の葉の観察結果に基づいて、葉のつくりの基本的な特徴を見いだすとともに、それらを光合成、呼吸、蒸散などの働きと関連付けてとらえることができる。(科学的な思考)

③ 葉のつくりについて分かり易くまとめたり、光合成、呼吸、蒸散などの働きを調べる観察・実験を行い、基本操作を習得するとともに、観察・実験報告書を作成したり発表したりする。
(観察・実験の技能・表現)

④ 葉のつくりと働きを関連づけて理解し、知識を身に付けている。　　(知識・理解)

(2)　指導上の工夫点（視点）

① 授業の力点
- ア 教科の目標を理解し、ねらいに即した授業を実践する。
- イ 生徒の思考を深める発問を吟味する。
- ウ 書き表す活動を通して書く力を高め、表現する力を高める。
- エ 体験活動を取り入れ、「思考力」「判断力」「表現力」の向上を図る。
- オ 理解の定着を図る活動を工夫する。

② 指導体制の改善
- ア 考えを引き出すために、学習形態を工夫する。
- イ 個に応じた授業展開を図る。

③ 教材の開発
- ア 生徒の興味・関心を高めたり、自分の学習課題を解決したりするための教材を工夫する。

④ 指導と評価の一体化
- ア 指導案を工夫し、授業のねらいや個に応じた指導をより一層意識して授業展開を行う。
  指導案の中に「目指す生徒の具体的な姿」「思考の深化や変容を導くための工夫」「表現する力を高める場」を記載する。
- イ 評価を生かした手立ての工夫をする。

Ｂ－１　単元計画と評価計画　　**Ｂ－２　指導法の工夫**

３　指導の実際

段階	学習内容・活動　〔学習形態〕	評価場面・評価方法及び支援（・）
導入	１　これまでの学習をふりかえり、本時の学習に見通しをもつ。〔全体〕	・複数の葉を提示し、興味・関心を高め、課題への意欲付けとする。
展開	２　本時の課題をつかみ、予想する。〔全体〕	・小学校での既習事項や生活経験を想起し、予想できるようにする。
	いろいろな植物の葉の似ているところ・ちがうところを見つけよう	
	３　比較しながら観察する。〔個〕 ・　葉の筋の通り方 ・　色、大きさ、形、見た目 ・　手ざわり、裂け方	植物の種類による葉の作りの共通点や相違点について調べようとしている。 行動観察やノートの記述から評価する。
	４　観察結果を交流しあう。〔個→グループ→個〕 ・他のグループと結果を交流しあう。	・自分が気づかなかった点に気づけるように声をかける。 ・グループの結果を伝える場を設定する。
	５　観察結果から考察する。〔個→グループ〕 表現する力を高める場 観察結果を分析し整理するために書く	・交流で新たに気づいた点も書き加えるよう促す。 目指す生徒の姿 観察結果を５つ以上書いている姿 ・個々の考えを交流する場を設定する。
まとめ	６　本時の学習をまとめ、次の学習に見通しをもつ。〔全体〕	・各グループでの考察を交流する場を設定する。
	植物の種類によって葉にも、似ているところやちがうところがある	

Ｃ－１　指導案

４　成果と課題

(1)　成果

① 授業の力点

ねらいや課題を明確にし、課題解決に結びつく導入や教材提示を工夫することで、生徒の興味・関心を高めることができた。

司会や発表のモデル例を示すことで、自信をもって発表・発言できる生徒が増えた。また、グループ間交流の場を設定することで表現する機会が増え、考えの交流の活性化が図られた。

② 指導体制の改善

グループ内交流やグループ間交流の場を設定することで､生徒は自分が気づかなかった新たな考えに気づき、自分の見方や考え方を広げることができた。

③ 教材の開発

多種類の植物に触れ観察することで､生徒の植物に対する関心を高め次時の学習につなげることができた。

(2)　課題

表現する力を高める場では、ただ書くのではなく、自分の考えを整理するためや自分が考えたことを相手に伝えるため等のなんらかの思考をともなって書く（表現する）場であることが大切である。

生徒の興味・関心をさらに高め、生徒達の「言いたい」「伝えたい。」という気持ちを引き出す課題や発問の工夫が必要である。

グループでの話し合い活動をさらに活性化させ、生徒同士の学び合いが有効に行われるための手だてが不足している。

事例３２　　単元「地球と宇宙」

月の形が変わって見えるのはなぜか

理科　第３学年
かほく市立宇ノ気中学校

１　事例の概要

本校は、平成 20・21 年度石川県の「児童生徒の「活用力」向上モデル事業」の推進モデル校の指定を受け、「意欲を持って学習に取り組む生徒の育成」を研究主題として研究を進めてきた。

生徒の実態は、観察・実験を真剣に取り組む生徒が多く、的確な観察・実験操作を行えるように成長してきた。そこで、自らが情報を集め、編集し、考察していく力等の活用力向上のため、今年度は、教科における活用力とは何かを定義し、実践を行った。

理科における活用力

・既習内容を用いて正確に観察・実験を計画する力
・観察・実験を行い、自然事象を科学的に考察し、説明する力
・自然事象を既習の学習事項とつなげて表現する力

Ａ－１　学校研究（理科）

２　実践内容

⑴　単元の目標

・天体の動きや特徴に興味・関心を持ち、天体の動きを観測・観察したり、調べようとする。（自然事象への関心・意欲・態度）
・天体の動きや見え方を地球の自転、公転、地軸の傾き、天体の位置関係などから推論し、とらえることができる。（科学的な思考）
・天体の動きを適切な方法で観測し、記録することができる。　（観察・実験の技能・表現）
・地球の動き（地球の自転や公転）による太陽・星の動きや天体（金星や月）の満ち欠けなどの現象を理解する。（自然事象についての知識・理解）

⑵　指導上の工夫点

自然事象に対する驚きを体験させ、既習事項を繰り返し学習することで地道に基礎的・基本的な知識及び技能を習得させるとともに、班活動等を通して学びを深め合いながら科学的思考力も伸ばす工夫をした。特に、活用力向上のために、次の活動を重点に取り組んだ。

① 事実を正確に理解し伝達する活動
・天体の観測・観察の結果が記録と結びつくようなワークシート（Ｂ－１）の工夫。
・班活動等の中で、教師が事実を確認し合い、学びを深めさせる発問の工夫。

② 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする活動
・一人一人がモデル実験を行える教材・教具の工夫（Ｂ－２）。

③ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる活動
・既習事項の学習内容を、他の授業につなげさせるための掲示の工夫。
・作図（補助線）を用いた効果的な説明方法の工夫（Ｂ－３）。
・教師が、課題解決に向けた適切な発問を行い、話し合い活動を積極的にリードした。

Ｂ－１　ワークシート　　Ｂ－２　教材・教具　　Ｂ－３　掲示

３．指導の実際

段階	学習活動と主な学習の流れ	指導（・）と評価及びその方法（囲み）
つかむ	１．月の見え方が変化することや太陽の位置と地球・月の動きを確認する。	・月のビデオ（シミュレーション）教科書等を見て、確認させる。
	２．課題を知る	
追求する	課題： 月の形が変わって見えるのはなぜか。	
	３．太陽・月・地球の位置関係に着目しながらモデル実験を行い、月の見え方を記録する。	・太陽の光があたっている面と当たっていない面を月と太陽の位置関係に着目させて考えさせる。
深める	・太陽－地球－月（一直線）の位置関係の時、満月に見える。	・モデル実験でどのように月を公転させればよいかを考えさせる。
まとめる	４．太陽・月・地球の位置関係による月の見え方の理由を発表する。	・地球から見た月の形の変化を、太陽・月・地球の位置関係の変化と関連づけてレポート上に補助線を描きながら図示している。〈授業のようす・レポート〉【思考】
	５．まとめ	・黒板に補助線を描かせ、その図を利用して、説明をさせる。

Ｃ－１　指導案

４　成果と課題

(1)　成果

活用力を高めるために、まずワークシートに自らが考えて書く練習からはじめた。他人の情報も参考にしながら思考したことを記入させたことで、全員に考えを持たせたり、見通しを持たせたりすることができた。また、一人一人に天体などの教材・教具を持たせて考えさせたことで、多くの生徒がモデルを使って試行しながら現象を確認し、考えることができるようになった。さらに、この過程で、教師が課題解決にむけた適切な発問を行うことで、自ら考えるだけでなく、班員相互の情報を集めながら適切な方法を見いだす班が多くなった。

(2)　課題

天体の条件設定を確認後、モデル実験を行った。しかし、生徒が条件とモデル実験における月（天体）の動きとを一致させることがなかなかできなかった。本時は、モデルの動きを３つの段階にわけて実験した。本時の生徒の理解度から考えると、さらに細かい段階に分けて実験を指導し、学習効果を検証する必要がある。

また、発問をより具体的にするとともに、いろいろな表現を活用し指導することが大切である。

ワークシートの記録においても、見たことを正確に記録させるために、個々の生徒へのきめ細やかな発問や指導が重要である。

Ｄ－１　生徒感想

事例３３　　単元「生物の細胞と生殖　生物の増え方」

モデル実験で孫の代の種子の形を調べよう

理科　第３学年
七尾市立朝日中学校

１　事例の概要

本校では昨年度より２年間、「児童生徒の『活用力』向上モデル事業」活用力モデル校の指定をうけ、研究実践を重ねてきた。本校の生徒の現状より、今年度はこれまでの研究主題に加えて「めざす生徒のすがた」を「課題に対して根拠のある考えを持つことができ、それを文章や話し言葉で表出することができる生徒」と設定し、それを目標として各教科で取り組んできた。

(1) 各教科での取り組み

・活用力を育むための６つの学習活動を効果的に授業に取り入れること。
・グループ学習での「話し合い活動」を効果的に実践すること
・基礎学力の向上を図ること

に重点をおいて取り組みを続けてきた。

(2) 理科での取り組み

(1) での取り組みに加え、

・授業では課題を明確に提示し学習内容をはっきりさせること
・できるだけ観察・実験を行うようにしたこと。また、実験を行うには、予想とその根拠をワークシートに書くこと
・視聴覚教材をできるだけ用いることによって学習内容への生徒の興味・関心を引くこと

をさらに意識して取り組みを行った。

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

(1)　単元の目標

・細胞のつくりや生殖のしくみについて興味を持ち進んで観察しようとしたり、意見を述べようとしている。（自然事象への関心・意欲・態度）
・無性生殖や有性生殖の特徴をまとめることができる。（科学的な思考）
・観察や実験を手順通りきちんと行うことができ、結果を正確に記録できる。（観察・実験の技能・表現）
・減数分裂と体細胞分裂のちがい、染色体のはたらき、有性生殖と無性生殖の違いについて理解できる。（自然事象への知識・理解）

(2)　指導上の工夫

① 指導法の工夫

・小グループでの話し合い活動を取り入れ、思考する場面、説明する場面を意識的に設定した。
・意見交換することで考えを整理し、再考させることでの思考力の向上をめざした。
・また、小グループ同士で意見発表を行うことで発表機会を増やすと同時に発表時間の短縮を図った。
・グループでの話し合いと発表には発表ボードを用いた。それにより思考を可視化し共有できると考えた。

② 理科としての活動の工夫

・実際にはなかなか行うことができない遺伝についてモデル実験を行い、その結果から考えることにした。

・子から孫に遺伝子が伝わることで親の形質が孫に伝えられることをモデル実験の結果から考える活動を取り入れた。

Ｂ－１　理科での６つの学習活動

３　指導の実際

学習活動	評価場面・評価方法 及び学校研究との関連
(モデル実験後) ３　実験結果からグループで、丸：しわ＝３：１になった理由について考える。 ○各自で実験結果についてその理由を考える ○グループ内での意見発表を行う。 ○グループ内の意見をまとめる。 ○他のグループへ自分のグループ内の意見を発表する。 ○他のグループの意見を参考にしてまとめる。 ４　代表のまとめ ○教師のまとめ	・既習事項の優性の法則を思い出して考えている。(活用力場面) ・モデル実験の結果から種子の形が親から子に伝えられることを遺伝子の存在を意識して科学的に考えている。　(評価規準) ・行動観察、ワークシート (評価方法) ・他者の意見を参考にして自分たちの意見を再考する。 (活用力場面)

Ｃ－１　指導案　　**Ｃ－２　ワークシート**

４　成果と課題

(1)　成果

・活用力向上のための6つの学習活動（Ｉ）を意識的に授業に取り入れようとしたことで、生徒は日常生活と理科での学習内容の関連について考えるようになった。

・グループ学習によって意識的に思考する場面、発表する場面を設定することができた。
そのために、じっくりと考える習慣がついてきた。
また、発表場面では普段なかなか発言しない生徒でも発言するようになってきた。

・グループ内の生徒同士で学び合いが見られるようになり、学習活動が活性化した。

・生徒への学習アンケートでは「グループで学習することが楽しい」「グループ学習によって以前より力がついた」と答えた生徒が生徒全体の80%、90%以上にも達した。

(2)　課題

・グループ学習は各教科の課題を解決するための方策であり、あくまで教科の目標を達成することが最優先であることを忘れてはならない。

・グループによっては話し合いが停滞することもあったので、学習リーダーを時間をかけて育てて行く必要がある。また、グループのメンバー編成についても今後考えていく必要がある。

・グループ内での話し合いの場面では発言できる生徒が増えてきてはいるが、全体の場でも躊躇なく発言できるような手立てを今後どうするか。

事例３４　　単元　Unit 4 “Homestay in the United States”

「相手が納得するアドバイス」

英語　第２学年　少人数授業
川北町立川北中学校

１　事例の概要

本校の教科・領域の活用力の考え方は、授業においては、学ぶ意欲を高める授業を工夫することによって育つと考える。関心・意欲を高めることが、疑問や課題を発見する力（思考力・判断力）となり、疑問や課題は解決するための資料・事実を探究する力（思考力・判断力）となり、課題解決はまとめ、表現し、伝える力（表現力）となり、その学習の達成感や満足感は、次の学習への意欲・態度につながり活用する力を育てていくと考える。

今年度は研究の視点として、疑問・課題の発見においては【学ぶ意欲の向上】、資料・事実の探究においては、【学び合いの場の設定】、課題解決の表現、伝達としては【言語活動の充実】という３つの視点から、「学ぶ意欲を高める授業づくりの工夫」の研究をすすめた。

この３つの視点のなかで、英語科の【学び合いの場の設定】を視点とした英文作成の授業実践を報告する。今回の授業では留学先でホームステイしている２人の悩みを理解し、それに対するアドバイスを考えることが中心の活動であった。本単元で学習する have to と must を用いて単に英文を考えるだけでなく、相手や自分の立場も考えた上で、悩んでいる２人が納得するアドバイスを考え、表現するためペア活動を取り入れた。またペアで考えたアドバイスを実際に人に伝えようと、アドバイスをビデオに向かって伝えるビデオレター作成を基礎コースで行なった。発展コースでは、ペアで考えたアドバイスを伝える役だけでなく、悩んでいる２人の役も設定し、感想や決意などを返す活動にまで発展させた。ペアでアイディアを出しながらアドバイスの文を作り、それをビデオレター作成で共有し、実際に感想を言うことで自然なコミュニケーションにつながるという更なる学び合いができたと感じている。この授業後、各ペアで考えたアドバイスを掲示することで、更に共有化を図り、次の表現活動への意欲向上につなげられたと感じている。

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

(1)　単元の目標

must / mustn’t を用いて、アドバイスを書くことができる。（表現の能力）

(2)　指導上の工夫点

【活用力を向上させるための学ぶ意欲を高めるための工夫】

① 場面をとらえて言語活動に取り組む工夫

動画を用いて英語の音声と映像で場面を捉え、状況や心情を理解した上で、それに対応するための言語活動につなげた。

② 表現力向上の工夫

ホームステイをして悩みを抱いている生徒に対するアドバイスを英語で考えることに加えて、他の生徒のアドバイスを聞いて感想を英語で述べる活動を設定した。

③ 思考力・判断力向上の工夫

アドバイスを考える際に、一人一人の考えを広げたり、深めたり、その考えをまとまりのある内容で構成したりすることを目的に、ペア活動を取り入れた。

Ｂ－１　評価計画

３　指導の実際　（発展コース）

時間	学習活動	主な発問（●）と指示（▲）	教師の支援（○）評価（☆）活用力（★）
深める	Introduction ・奈々とカルロから届いたビデオレターを見る。 ・相談の内容を理解する。	●奈々とカルロは、どんなことに悩んでいるのでしょう？	
	奈々とカルロが聞いて納得するアドバイスをしよう。		
	Activity ・ペアになってアドバイスを考える。 ・ワークシート（個人用と発表用）にアドバイスを書く。	●みなさんが 2 人の先生ならどのようなアドバイスをしますか？ ▲must や mustn't を使ってアドバイスを考える。 ▲辞書を使用してもよい。	★自他の考えを比較、整理し、より良い内容を求めながら書く力。　（学び合う力） ☆must や mustn't を用い、説得力のある内容でアドバイスを書くことができる。 【表現】ワークシート ○自分ならどう言ってほしいか考えてみたり、教師からヒントを出したりする。
まとめる	Conclusion ・ペアで考えたアドバイスを相手に伝わるように発表する。 ・奈々、カルロ役ペアは感想を簡単に述べる。 Closing	●みんなのアドバイスはそれぞれどんな内容でしょう？ それを聞いて奈々・カルロならどう思いますか？ ▲先生役のペアと奈々・カルロ役のペアを決める。単にアドバイスを発表するだけでなく、奈々・カルロ役はアドバイスを受けて、感想や決意等を先生役に応答し、自然な会話になるようにする。	

Ｃ－１　指導案　　Ｄ－１　ワークシート　　Ｄ－２　ワークシート（生徒作品）

４　成果と課題

(1)　成果

映像を用いることで、生徒達は、二人の相談内容に加えて心情にも迫ることができたため、一層相手のことを考えたアドバイスを作ることができた。また、自分達が考えたアドバイスで状況や気持ちがどう改善されるのか、理由も付け加えて発表することができた。

発展コースでは他の生徒のアドバイスに対し、感想や決意を述べる活動も取り入れ、相手の考えを聞いて理解し、自分達がその内容について思ったことを英語で述べることができた。この活動でペアでの学び合いだけにとどまらず、クラス全体への共通理解にまで広げることができた。

このような活動を通して、生徒達は一方的に伝えるだけでなく、伝えられた内容を理解して、更にそれに対して自分の考えを言うことができるようになってきた。このことは、話題をつなげたり、広げたりしながら自然なコミュニケーションを図る上で大切なことであると考えている。

(2)　課題

２年生の英語科では、少人数授業を行っているので、いつも授業の導入においてそれぞれのコースのねらいをはっきりおさえておくことが必要である。また英語で聞いて、考え、表現するという一連の学習活動をすべて英語で行えるような課題内容や、具体的な手立て等をさらに工夫していく必要がある。英語を用いてコミュニケーションを図る手本を示すという意味においても、英語の表現をより多く与えるという意味においても、教師が自然なかたちで、できるだけ多く英語を用いるようにしたい。

事例３５　　Chapter 2 Kanazawa Culture（金沢市英語副読本 This is Kanazawa for 8th graders）

金沢の文化について語り合おう

英語　第２学年
金沢市立城南中学校

１　事例の概要

本校は、平成１８・１９年度に石川県読解力向上推進事業研究校の指定を受けた。また平成２０・２１年度に児童生徒の「活用力」向上モデル事業研究校の指定を受け、「ことば力向上～学び合いのできる生徒の育成を目指して～」をテーマとして研究実践を行ってきた。

よりよい人間関係をつくれない生徒の中には、語彙力や表現力が不足している生徒も多い現状がある。英語科においても、思考することや論述することに抵抗を感じている生徒もいる。そのため基礎・基本の確実な定着を図るとともに、授業の中で様々なテーマについて資料を読み（聞き）、思考し記述する場を確保し、質の高いコミュニケーション力や表現力を育成することをめざした。

Ａ－１　学校研究　（英語科の「研究実践」を含む。）

２　実践内容

(1)　単元の目標

・金沢の文化（金箔・百万石祭り・加賀鳶・和菓子）について、わかったことを英語でわかりやすく説明したり、自分の意見や理由を英語で表現したりできる。　【表現の能力】

・金沢の文化について英語で話を聞いて英語で理解したり、友達の発表を聞いて理解したりできる。　【理解の能力】

(2)　指導上の工夫点（視点）

① 指導法の工夫

・オープンエンドの課題設定

副読本の理解の延長上に各自の思いを語り合う活動を設定する。１年生の「ＡＬＴに一番紹介したい金沢の観光名所」、３年生の「もし金沢市長だったら、金沢をどのような都市にしたいか」という課題との系統性を考慮し、「１００年後まで残したい金沢の文化」について選んだ理由を含めて説明するという課題を設定する。

・発問の工夫

学習内容の理解を助け、Ｑ＆Ａを活用し、無理なく自己表現活動に橋渡しできるようにする。また、何のためにそのテキストを読むのか、何を読み取らせたいのかを明確にし、主体的に考え、判断しながら理解できるように、内容や意見を批判的に捉えさせる。

・コミュニケーション力を高めるグループ活動

文化についての理解や伝える内容の構成はグループで協力して考えることによって、全員発表に参加できる基盤を作る。また、自分の意見や話し合いの表現について既習事項を確認し活用できるようにする。

② 評価法の工夫

・定期テスト、実力テストにおける「活用力」を問う問題の出題

・レポート作品での評価

・スピーチやプレゼンテーションなど発表の評価

Ｂ－１　評価問題例

３　指導の実際

次	学習内容及び学習活動	評価規準	ことば力向上に迫る重点目標
第一次 ３時間	・金箔について説明を聞き、理解する。 ・金箔の説明文を考え、自分の意見を加える。　【城南スタンダード】	・説明文を理解できる ・自分の意見を考えることができる	・キーワードを見つける ・自分でリライトする ・意見を表現する
第二次 ２時間	・１００年後まで残したい金沢文化（金箔、百万石祭り、加賀鳶、和菓子）を選び、説明文とその理由を考える。	・与えられた情報を用いることができる	・ナンバリング ・結論先行 ・理由付け
第三次 ２時間 （本時）	・金沢文化についてグループで自分の意見を発表する。 ・他の人の意見を聞き、メモを取る。容について、質問をする。	・グループで話し合いができる	・意見交換をし、結果報告ができる

オープンエンドの課題設定

スピーチやプレゼンテーションなど発表の評価
レポート作品での評価

生徒の学習活動	時間	・指導上の留意点　◇教師の発問　○評価
２．前時までの復習 ・英語でインタラクションしながら前時までに学習した伝統文化を確認する。	5	◇What did you study last class?　Please raise some kinds of Kanazawa's traditional culture? ・伝統文化についての写真を提示しながら英語で進める。 ◇What do you think is the most important Kanazawa's traditional culture? ・何人かを指名して金沢の伝統文化の中で自分が一番大切だと思う金沢の伝統文化について答えさせる。
課題　　金沢の伝統文化の中で一番伝えたい文化を発表しよう		
３．グループ発表のための確認 ・英語でインタラクションしながら、ディスカッションの中の表現を確認する。	5	◇You studied about some useful expressions for group discussion. What are the useful expressions? ・英語でインタラクションしながら、司会者の表現、ディスカッションの中の質問の仕方や応え方を確認する。 ・ナンバリングをして、スラスラと言えない場合は言えるようにさせる。

発問の工夫

コミュニケーション力を高めるグループ活動

Ｃ－１　Kanazawa Culture 指導案　　Ｃ－２　ワークシート

４　成果と課題

(1)　成果

・司会をするときの表現や質疑応答に慣れて、グループ活動が円滑に行えるようになった。
・授業の中で発表の場を多く経験したことにより、全体的に発表する力がついてきた。
・文章を書くことや話すことに対する抵抗感が減り、伝える内容や方法を工夫できた。

(2)　課題

・限られた時間内に長い英文を読み、その内容を理解する力が弱いことから、時間設定の中で読解する力を育成する必要がある。
・場面に応じて既習を活用する力が不十分であることや、文章構成に気をつけて英作文を書くことを苦手とする生徒に対する手だてを講じる必要がある。
・英語の活用力を評価する問題の作成と実施、検証方法の工夫が必要である。

事例３６　　単元「Unit4 Homestay in the United States」

「確かな学力を身につけ、自らの学びを広げる生徒の育成」

―確かな学力の定着を図る指導法の工夫―

英語　第２学年
志賀町立富来中学校

１　事例の概要

本校では、3 年前から生徒の「確かな学力の育成」をテーマに学校研究に取り組んできた。研究の重点を「わかる授業の実現」に置き、生徒の学習意欲の向上を目指した指導法の工夫、改善に取り組みがなされてきた。平成 20 年度、県教委から「児童・生徒の活用力向上モデル事業」研究実践校に指定されたことから、「確かな学力」を育むために必要な要素として「学びの基本の定着」、「活用力を支える力の育成」、「活用力を向上させる力の育成」の３つを設定し、具体的な取り組みを行ってきた。さらに今年度は、３つの柱としてⅠ 基礎的・基本的な知識、技能の習得、Ⅱ 「活用力」向上のための授業の工夫、Ⅲ 自ら学ぶ力の育成 を設定し、研究の重点としてそれぞれに具体的な取り組み実践が行われている。その中で英語科として「活用力を向上させる力の育成」に向けた授業実践を公開する。

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

(1)　単元の目標

・have to, don't have to, will, must , must not を用いた簡単な対話活動に意欲的に取り組む。
（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）

・have to, don't have to, will, must , must not を用いて身の回りのことや，自分のことを表現することができる。（表現の能力）

・have to, don't have to, will, must, must not が用いられている文の意味を正しく理解することができる。（理解の能力）

・日本と外国との生活習慣の相違点について理解する。
（言語や文化についての知識・理解）

(2)　指導上の工夫点

①「学びの基本」の定着
　ア 学習規律の定着を図るためにベル着、挨拶の遵守。

②「活用力を支える力」の育成に向けて
　ア 望ましい人間関係を構築し、学びの集団の育成を図る。

③「活用力を向上させる力」の育成に向けて
　ア 基礎的・基本的な知識、技能の習得に関して普段の英語活動や、ワークシートでの確認で徹底を図る。
　イ 表現力を向上させるためにウォーミングアップの活動において答えの文にプラスもう一文付け加える。
　ウ ペア活動やグループ活動を多く取り入れ、生徒がお互いに学び合い、個々をより高め合うような場面を設定する。

Ｂ－１　Ｑ and Ａシート

３　指導の実際

主な学習活動　　（配時）	支援（○、●）と評価場面・評価方法（◇）
１．Warm up をする。(5) ・ALT と Q and A を行う。 ２．本時の課題の確認をする。(5)	○ヒントを与える。
自分の家のルールについて発表しよう。	
３．have to, don't have to を使って自分の家でしなければならないこと、しなくてよいことを英作し、発表する。 ・メモを取り、友達の発表を○○has to や、○○ doesn't have to を使い発表する。	◇have to, don't have to を用いて自分自身のことを意欲的に表現しようとしている。 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】 ○個別に支援をする。 ●具体例を挙げ支援する。 ○既習の表現を使いながら英文にまとめているか。（表現）

Ｃ－１　指導案

４　成果と課題

（１）成果

①「学びの基本」の定着

継続して指導することによって、日々の学習態度に反映、向上が見られた。落ち着いた様子で授業に取り組んでいる。

②「活用力を支える力」の育成に向けて

協力して活動に取り組むことや、エンカウンターを行ったことで、生徒間の人間関係も改善されてきており、わからないところを教え合える学びの集団が形成され、さらに主体的な学びへとつながってきている。

③「活用力を向上させる力」の育成に向けて

既習事項の確認は単元のワークシートをもとに繰り返し行われ、徐々に効果が現れてきている。ウォーミングアップにおいては、生徒は２文で答えることが定着し、表現力の向上が見られている。ペア活動やグループ活動においては、最初は戸惑いが見られたものの、積極的に取り組み、協力し合える学びの集団を形成してきている。

（２）課題

基礎的･基本的な事項の向上は見られるが､定着度合いにおいてはまだ十分とはいえない。文法事項のみならず、語彙力の向上など取り組まなければならないことがある。また、ウォーミングアップにおいては、生徒に飽きが来ないよう質問に新出の英文を取り入れていくなど変化をつけていかなければならない。英語科においては状況設定を正しく行い、英語を使い会話する場面を数多く設定し、表現力を向上させていきたい。

Ｄ－１　成果と今後の課題

事例３７　　単元「Unit 5　A Park or a Parking Area」

地域をテーマにした表現力の育成～あなたは将来、珠洲に住みたい？～

英語　第２学年
珠洲市立三崎中学校

１　事例の概要

本校では活用力（思考力・判断力・表現力）の育成を目指して、「わかる授業」を研究の柱として「課題をつかむ場」、「活用する場」、「まとめ、振り返る場」の３つの場面を設定し授業実践している。

英語科では基礎・基本の定着とそれらを活用して自分の思いや考えを表現する力の育成を目指している。そのため、４技能をバランスよく取り入れた言語活動を行いながら基礎・基本の定着を図ること、また、表現力育成を目指した言語活動（活用の場）を設定することを心がけている。本校の２年生は、表現する言語材料の理解が不十分であったり、伝えたい内容を適切に表現したりすることができない生徒が多い。そのため、基礎・基本の定着を目指した指導を更に充実させること、表現することへの意欲を持たせるためにテーマ設定を工夫すること、自分の意見や考えをしっかり持たせるための工夫などが必要である。

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

（１）　単元の目標

① 間違うことを恐れず、自分の気持ちや考えなどを表現する活動に積極的に取り組もうとしている。（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）

② 伝えたいことを正しく伝えたり、意見や感想を伝えたりすることができる。（表現の能力）

③ まとまった英文を読んだり、聞いたりして概要をつかむことができる。（理解の能力）

④ 「if 節」「that 節」「when 節」「because 節」を含む文の形・意味・用法を理解している。（言語や文化についての知識・理解）

（２）　指導上の工夫点（視点）

① あるテーマについて自分の意見をまとめ、友達と意見交換する活動を通して、習ったことを活用させる。

② 表現することへの意欲を持たせるため、テーマを生徒からのアンケートをもとに設定した。

③ 文章構成の仕方を提示した。

Ｂ－１　単元計画

３　指導の実際

（１）本時のねらい

・将来、珠洲に住みたいか住みたくないか、またその理由についての発表を聞いて、意見や感想を言うことができる。（表現の能力）

（２）本時の活用する場について

・if/that/when/because-節の従属接続詞や「不定詞」を用いて将来、珠洲に住みたいか住みたくないか、またその理由についての発表を聞いて、「I think so, too, because～.」「I don’t think so, because～.」などの表現を用いて意見や感想を言う活動を活用の場とする。

過程（配時）	学　習　内　容	留意点（・）と評価（◎）と支援（○）
	4 本時の課題を把握する。 **「将来、珠洲に住みたいか住みたくないか」また、その理由についての発表を聞いて意見や感想を言おう！**	・本時の課題を提示する。
展開（３５分） １０分	5 ペアでの発表練習 同じ意見を持つグループに分かれ、ペアで発表練習を行う。 A(4 人)･･･珠洲が好き／珠洲に住みたい B(4 人)･･･珠洲が好き／珠洲に住みたい C(5 人)･･･珠洲が好き／珠洲に住みたくない D(4 人)･･･珠洲が嫌い／珠洲に住みたくない	・発表練習では、３つのポイントを意識しながら練習するよう促す。 （発表者） ・図や絵を用いて、理由を３つ説明する。 ・聞き手を意識して発表する。 ・原稿を見ないで発表する。
１３分	6 ペア同士で発表練習（４ケ所で□が発表する） １回目 A1－C1 ／ B1－D1 ／ A2－C2 ／ B2－D2 ２回目 B1－C1 ／ A1－D1 ／ B2－C2 ／ A2－D2	・聞き手には、発表を聞いて自分の意見や感想を必ず言うようにする。 （聞き手） ・発表を聞いて、自分の意見や感想を言う。
１２分	7 数グループが発表し、発表を聞いて、意見や感想を言う。	◎将来、珠洲に住みたいか住みたくないか、またその理由についての発表を聞いて，意見や感想を言うことができる。（表現の能力）〔観察〕 ○自分の意見や感想をうまく言えない生徒には、「I think so, too, because～.」「I don't think so, because～.」などの表現を提示し、それらを使って表現するよう促す。

Ｃ－１　指導案（本時）　**Ｃ－２　ワークシート**

４　成果と課題

（１）　成果

「将来、珠洲に住みたいか住みたくないか」またその理由について発表する活動では、ペアによる従属接続詞（if/that/when/because）の口頭練習を毎回の授業のウォームアップに取り入れたこと、文章構成の仕方を提示したこと、発表の注意点を明確にして十分な練習時間を確保したことなどから、発表原稿を見ないでしっかりと表現することができた。

また、表現するテーマを生徒のアンケートをもとに決定したことにより、表現することへの意欲を持たせることができた。

（２）　課題

自分の意見を、原稿を見ないで発表することはできたが、聞き手を意識した発表の工夫（アイコンタクト・ジェスチャー・繰り返しなど）がまだ不十分である。また、基本表現の定着が不十分であり、相手の話すことを聞いて自分の意見を持つという習慣が身についていないため、質問に対して即座に答えることができない生徒が多い。生徒が意欲的に表現できる場面設定を仕組み、コミュニケーションへの関心を高めること、自分の考えや意見を表現するための基本表現を普段から意識させることなどが必要である。

事例３８　　単元 「 Unit ４ An American *Rakugo-ka* 」

表現力育成のための授業実践

英語　第３学年
輪島市立南志見中学校

１　事例の概要

本校では、「確かな学力の向上につなげる『活用力』の育成 ～活用の場面を工夫した授業実践を通して～」を主題として研究を進めている。本校の生徒は、学習事項の整理や相互関連の把握、柔軟で多面的な思考や判断をやや苦手とする傾向がある。また、切磋琢磨し合って学び合おうという姿勢も不足している。そのため学習活動においては学習事項を整理・統合する活動、既習の知識・技能を活用しながら個々の考えを練り上げていく活動を通して、学び合おうとする姿を育成していくことが大きな課題となっている。そこで「活用力」が身についた生徒のイメージ像を作り、そのイメージに近づくために、単元オリエンテーション→授業実践→単元テスト→生徒の振り返り→教師の検証を組み入れた単元指導計画を作成した。そして、単元レベルでのPDCAサイクルを積み上げることで活用力の育成を図ることにした。

英語科においては活用力が身についた生徒のイメージを「初歩的な英語を読んだり聞いたりしてその概要をつかみ、それについて自分の意見や感想を英語で表現することができる」とし、３年生は「わたしたちの修学旅行記」「わたしたちにできる国際支援」「日米の文化の違い」「小学校から英語学習は必要か」の４テーマで「書いて発表する」活動を積み重ねてきている。発表の段階では、ポスターやピクチャーカード、ジェスチャーや音楽など伝える手段に工夫をもたせることで、発表者の意図することを伝えやすくしたり、QandAや意見交換を取り入れることで、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させるようにしてきた。

Ａ－１　研究構想図　　Ａ－２　研究仮説と研究内容

２　実践内容

（１）　単元の目標

① 目的地までの電車やバスでの行き方をたずねたり、教えたりしようとする。
（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）

② 日米の文化の違いについて書いたり、それについて友達と話し合ったりできる。
（表現の能力）

③ 日米の文化の違いや言語表現の違いについて、本文の内容を読みとることができる。
インタビューを聞いて具体的な内容や大切な部分を聞き取ることができる。（理解の能力）

④「疑問詞＋ to 不定詞」と「It's ＋形容詞＋ for － to 不定詞」の文の形・意味・用法を理解している。
（言語や文化についての知識・理解）

（２）　指導上の工夫（視点）

① 日米の文化の違いを英文で伝え、意見交換するという活動を活用力育成のための活動とする。英文を書く際には、内容面の知識不足を補うために資料を準備したり、言語材料の不足を補うためにモデル文の提示を行う。発表ではペア→グループ→全体と生徒同士の学びの場を広げていく。

② スキット作りとそのペアによる発表練習では、友達と相互評価することでさらに質の高いものを目指すよう指導する。

③ Speaking Plus の本文の一部を変えたり、付け加えたりして口頭練習をする。

３　指導の実際

（１）　単元名　Unit 4　An American *Rakugo-ka*

（２）　ねらい　日米の文化の違いについて工夫して友達と話し合うことができる。（表現の能力）

過程	配時	学　習　内　容	評価（◆）と支援（◇）と留意点（※）
導入	5 分	２．日米の文化の違いを聞く。 ３．本時の課題を把握する。 日米の文化の違いについて、工夫して友達と話し合おう。 ４．ペアで工夫しながら発表練習をする。	※映像を見せることで興味・関心を持たせるようにする。 ※本時の課題を提示する。 ※発表する側には絵や写真などを使って発表をするように、聞く側には積極的に質問や意見を言うように促す。
展開	35 分	５．２ペアずつで３カ所にわかれて発表しあう。その際質問や意見も言う。 ６．発表場所を変えてもう一度発表しあう。 ７．２ペアが発表し、全体で意見交換を行う。	◆日米の文化の違いについて工夫して友達と話し合うことができる。 （表現の能力）（ノート） ◇【評価規準に到達していない生徒】 ノートを見ながらゆっくり発表したり、ペアで質問をするように促す。 ◇【評価規準に到達している生徒】 発表を聞き、積極的に質問や意見を言わせる。
まとめ	5 分	８．ワークシートで自己評価をする。	※友達の発表を聞くことで、いろいろな視点で日米の違いに気づかせる。

Ｃ－１　指導案　　Ｃ－２　単元オリエンテーションと振り返り表

４　成果と課題

（１）　成果

① ３年間の英語科のゴールを設定することで、各学年の到達目標がはっきりし、その到達度を確認しながら、生徒の着実な進歩を知ることができた。

② 単元オリエンテーション→実践→振り返りを通して、生徒自身が単元全体の構成を理解し目的意識をもって学習に取り組めるようになった。

③「書くこと」の系統的な指導を行うことで、 生徒自身が「書くこと」への抵抗を感じなくなり、興味のあるテーマを与えることで「書くこと」の意欲が高まった。その結果、定期テストでの英作文問題は無解答率が０％となった。また、書いたものを発表し意見交換することで、生徒自身が相手の意見や考えを大切にするようになった。

（２）　課題

① テーマについて意見が書けない場合は、内容面の知識不足なのか、言語材料の不足なのか原因を見極めその支援の方法を考える必要がある。

② 「書くこと」と「話すこと」の意欲は育ってきているが、正しい英文を書いたり話したりという点では不十分である。イントネーションやアクセントに注意しながら音読練習を行ったり、語順や主語に注意した英文づくりに取り組ませるなどの対策をとっていかねばならない。

事例３９　　題材名「アルトリコーダーにチャレンジ①」

音符の長さを変えて、曲の雰囲気を変化させよう

音楽　第１学年
白山市立北星中学校

１　事例の概要

本校では一昨年度まで生徒の「生きる力」を育むことを研究の主柱として、学力向上に取り組んできた。今年度は昨年度に引き続き、主題を「生きる力を磨くためには」とし、副題を「活用力を高める授業の研究」とした。そこで音楽科においては、生徒自身が自ら感じたことをもとにして、主体的に考え、工夫をしながら音楽づくりをしていく活動の中で、活用力を高めることができるのではないかと考えた。本題材は中学生になって最初に取り組む器楽教材であるが、アルトリコーダーの基礎的な奏法を学びながら、生徒自身が感じ取った曲想を意欲的に表現しようとする態度を養うことができると考え、この題材を設定した。１年時ではアルトリコーダーの導入として、左手だけの運指で基礎的な奏法の指導を行いながら、簡単なソロの曲やペアの曲を演奏することで、リコーダーの楽しさやハーモニーの楽しさに触れさせるように考えた。また２年時では右手の運指も加えることによって、更に幅広いアンサンブル活動の楽しさに触れ、ハーモニー感を味わわせ、自らが表現するための技能を得ようとする学習意欲の向上が図られると考えた。

Ａ－１　学校研究

２　実践内容

(1)　題材の目標

①【音楽への関心・意欲・態度】
　アルトリコーダーの音色や響きの美しさを感じ取りながら、関心を持ち、意欲的に練習することができる

②【音楽的な感受や表現の工夫】
　アルトリコーダーの音色や響きの美しさを感じ取りながら、曲想に応じた表現の工夫ができる

③【表現の技能】
　アルトリコーダーの音色や響きの美しさを感じ取りながら、基礎的な奏法を身に付けることができる

③【鑑賞の能力】
　アルトリコーダーの音色や響きの美しさを感じ取りながら、表現の工夫を聴き取ることができる

(2)　指導上の工夫点

① 基本練習の工夫
　基本練習を繰り返し行う際に、教師の範奏を演奏させることにより注意深く教師の運指を見る場面や、後向きで範奏することにより音程を聴き分ける場面を設定し、音に対して集中する場面を授業中に設けると共に、ゲーム感覚で基本練習に取り組ませた。

Ｂ－１　単元計画・評価計画　　Ｂ－２　指導法の工夫

３　指導の実際

学習活動(○)と 予想される生徒の反応（・）	指導と評価方法 （※Ｃの生徒への手だて、☆活用力）
○２種類の奏法で『喜びの歌』を練習してみよう ・「長い音で演奏すると曲の雰囲気が柔らかく感じる」 ・「短い音で演奏すると曲の雰囲気が生き生きした感じに変わる」 ・「短い音は乱暴になりやすい」	・デフォルメして２つの違いがわかりやすいようにする ・運指が不安な生徒のために、前に立って範奏の運指を見せる 活用力 ☆奏法を変化させ、きれいな音色で演奏できるように工夫している　（判断力）
○音の長さを変化させて『かっこう』を演奏してみよう ・「最初の部分は短い音の方が雰囲気にあっている」 ・「最後の部分は長い音で吹いた方が良いのかな」	評価規準 ・音の長さを変化させて、曲想を工夫している　＜評価方法＞　観察・ワークシート ※デフォルメした範奏を行い、どの部分で変化させると良いか考えさせる

Ｃ－１　指導案

４　成果と課題

(1)　成果

① 基礎基本の確実な習得

基礎練習を工夫して繰り返し行うことで、運指につまずく生徒を少なくした結果、苦手意識を持った生徒が減少した。また左手の運指のみで演奏する平易な曲を多く取り組み、楽しさを前面に出すことによって、リコーダーの楽しさを感じる生徒も増加した。また、「喜びの歌」で学習した音の長短によって曲想が変化することを、「かっこう」で曲想を感じ取りながらリコーダー表現を工夫している姿が多く見られた。その結果、タンギングや息づかいを工夫したリコーダーらしい音色づくりと左手の運指などの基礎的な技能が身についてきた。

② 鑑賞マナーの徹底

１年時の鑑賞の授業の導入に際し、３年間を見通した音楽の授業時における鑑賞マナーを提示することで、器楽や歌唱の授業でＣＤ等を聴く際にも、静かに落ち着いた態度で聴くことができた。

(2)　課題

① 意欲的なリコーダーの授業

小学校の時にリコーダー嫌いの生徒に対して、導入時にはアルトリコーダーの興味や関心も高く意欲的な面も見られるが、２年時になると左手だけでは簡単なので、右手を使う生徒が難しく感じない教材の開発が、今後の課題であると思われる。

事例４０　　題材名　「エネルギー変換と利用」

「ＬＥＤ」が信号機に利用されてるのはなぜ？

技術・家庭科技術分野　第２学年
中能登町立鳥屋中学校

１　事例の概要

本事例は、２年生の技術分野において「エネルギーへの変換」の題材で、事前アンケートを行った結果、「エネルギーに関する学習に興味がありますか。」では『関心がある』が42%、『少し関心がある』が46%、『関心がない』が12%、「エネルギーの変換を利用した製作品の設計や製作に関心がありますか」では『関心がある』が72%、『少し関心がある』が24%、『関心がない』が4%であった。そこで、何か身近な話題を使って「熱、光、動力エネルギーへ変換されているしくみや技術進歩」について理解させたいと考え、近年注目されてきた「LED」が信号機に使われてきていることから新旧の信号機の実物を生徒の目に触れさせ、考えさせることで目標に迫りたいと考えた。

２　実践内容

(1)　題材の目標

・身の周りのエネルギーに関心をもち，エネルギーの変換方法やその利用について考えようとしている。（①生活や技術への関心・意欲・態度）

・目的の仕事や動作をさせるために製作品の設計や製作活動などを工夫し創造している。（②生活を工夫し創造する能力）

・目的の動作をさせる機構や電気回路を選択して，製作品の設計・製作ができる。（③生活の技能）

・製作品のエネルギーの変換方法や力の伝達の仕組みについて理解している。（④生活や技術についての知識・理解）

(2)　指導上の工夫点

① 指導法の工夫

・自動車のテールランプや携帯用ライトなど身近に利用されている LED を導入で提示し、旧式の信号機と LED 信号機を日本信号（株）から借りることができたので、２台の信号機を並べて提示した。

・新旧の信号機を実際に点灯させることによって、見たり、触ったりしながら、その違いをグループ活動と学習シートを利用して考察・発表させた。

② 技術・家庭科としての活動の工夫

・事前アンケートから、生徒はエネルギーの変換を利用した製作品には非常に高い関心を示したが、エネルギーに関する学習への関心は比較的高くない結果であり、実生活と結びつけながら生徒の興味・関心を引き出していく教材の提示や学習展開を行う必要があった。『関心がない』と回答した生徒の学習意欲を高め、『関心がある』と回答した生徒が学習を深化させられるようにグループ活動を有効に活用した。

③ 学習定着のための工夫

ア　本題材における「基礎・基本」の充実のための手だて

・各エネルギーに変換している具体物を提示するなどして理解を助ける。

・身近な生活場面による体験から想起させるようにする。

イ　本題材における「活用力」向上のための手だて

・新旧２つのものを比較することで、技術が進歩し生活が便利になっていることや省エネルギーになっていることに気づかせる。
・必要な情報を調べて、まとめ、発表する場の設定を行ったり、資料から読み取る学習の場の設定を行ったりする。

Ｂ－１　指導法の工夫

３　指導の実際

段階	学習内容	生徒の活動	・指導上の留意点と◎評価
導入 (10)	１　LEDはどんなところで使われているか。	・どこに使われているか発表する。	・前時に課題としておく。 ・実物の信号機を提示する。
展開 (35)	２　なぜ信号機にLEDが使われるようになったのか考察する。	・新旧２つの信号機を見たり触ったりしながら考察する。	・旧式信号で使われている電球を提示する。
	課題　なぜ信号機に LED が使われているのか。		
	・個人で考える。 ・新旧２つの信号機を比較しながら観察し、考察する。	「見やすいから」 「熱くならないから」 「電球が切れないから」	◎LEDが使われている理由を考察することができたか。（ワークシート）
	なぜ信号機に LED が使われているのか、グループで考え発表する。		
	・グループで考える。 ３　使われている理由を知る。	・個々の意見を交換する。 ・ボードに記入し、グループの考えを発表する。 ・LEDが使われている理由を理解する。 「省エネルギー」「信号の誤視の軽減」など ・LEDと白熱電球のちがいを知る。	◎LEDが使われている理由を考察することができたか。（ワークシート） ・LEDの構造について説明する。 ・信号機だけでどれだけ省エネにつながるか知らせる。 ・信号機の見間違いによる事故が減っていることを知らせる。
まとめ (5)	４　まとめる	・自己評価を行う。	・「分かったこと」や「感想」をグループ間で紹介し合う。

Ｃ－１　指導案　　Ｃ－２　学習シート　　Ｃ－３　評価カード

４　成果と課題

(1)　成果

・授業後の「評価カード」から「LED が使われるようになった理由が理解できた。」という生徒が全体の９２％を占めた。「LED を使えば省エネになる。」「LED がもっと普及すればよい。」という感想もあり、LED の有効性について気づいた生徒が多かった。
・実物を提示することで学習意欲が喚起され、グループ活動での意見交換も多くあり、学習活動が活性化した。普段の授業に比べ、ワークシートや評価カードの記入もしっかりできていた。

(2)　課題

・毎時間の実物提示は難しいものの、なるべく生活に直結するような教材を開発し、さらに意欲的に学習に取り組める工夫をしていく必要性を実感した。